

1月号

静寂をつき破って
歌が生まれた

心の奥底から湧き上がる歌
心が心呼び合う歌

天上に
六北っ子の声と光響かせ
今
六十一年の一ページを
開く

昭和61年1月1日
編集/発行
岡崎市教育委員会



(響け歌声—六ツ美北部小)

父と娘の会話。

父「最近の高校生の愛読書はマンガだつてね。名作文庫など読まないらしいな。」

娘「ウツソオ。」

父「NHKの世論調査に出ているって。」

娘「ホントニ？」

父「お父さんの若い頃には親の目を盗んでまで島崎藤村、夏目漱石など読みあ

さったもんだ。だから近視がひどくなつたのだ。貸し本屋で借りてなあ。」

容だどと感覚的に判断している。従つて話

はふくらまず、はずまず、しおれてしまつた。それにしてもこの父と娘の会話に

どうにもならないリズム感の差がある。

年長者の話は内容はともあれ、リズム感の乏しい、ガラガラ型が多く、若者の

それは極端にメロディアスで、リズムカ

ルである。だから話がうまくかみ合わない。

ことばは精神構造の一部で、表に現れ



話が遠くならないために

小六英介

一 教育随想 一

娘「カッワイ。」

父「マンガばかり見てるから字を知らん。

尾崎黄葉とかいて平気なんだから困つ

たもんだ。」

娘「ウーン、ソレハイエテル。」

これは実録の会話である。父は久しぶ

りに話ができると思つて切り出したのだ

が、会話はこれで切れてしまった。娘も父

親と話せる数少ないチャンスと淡い期待

言語とまでなっている。感覚的なのだ。

② 生まれた時テレビがあった。大きな

影響はCMである。あの短く刺激的で、フ

イーリングを重視した表現に積極的な関

心を示す。大人のような嫌悪感を持たな

いのだ。意味などどうでもいいのである。

③ マンガ、劇画を好む。彼等は絵を通

してストーリーを把握する。ことばは合

いの手でしかない。現代のマンガ本を見

てみるとわかる。大人が理解に苦しむ表

現が露骨にまで書かれている。

こうした世界にどっぷりとつかつてい

る若者は何ごとにつけ極めて感覚的に対

応してしまうのである。きちんと話をし

なければいけない時にも、それが出る。

どう考えても父と、あるいは教師と対

話するソフトがみつからないのである。

若者同士が話をしているのを録音してみ

ると、逆に大人が理解出来ないことばが

やたらに飛び交う。彼等にはそれで通じ

ていて楽しいのである。延々と続く。ま

とまりはない。音の交差に近いのだ。

そのリズム感、言語感覚、大人はおいて

いかれるばかりだ。なにをくだらんと、嫌

悪感と批判の思いを抱くのでなく、彼等

の中に入れてなくとも、アプローチする努

力が大切なことだと思ふ。ことばのモラ

ルを押しつけるより、ことばの美学(う)

甘言苦言

しっつけ



性格の多面性

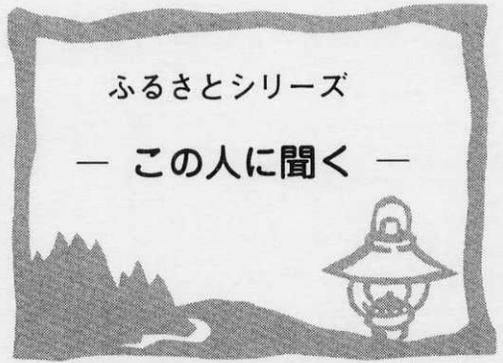
前緑丘小学校長

足立 誠

終戦後、私は二十代の小学校教師であつた。そのころ、誰かに聞いたか、もの本から知つたかは定かでないが、「性格の多面性」という言葉が妙に私の心をとらえて離れなかつた。四十年余の教職生活を終えた今、私は登校拒否の子どもたちにかかわつているのだが、この言葉がいつそう鮮明によみがえってくるのである。

神経症的な登校拒否の子どもたちは、小学校時代の「性格・行動の記録」にはおしなべて「真面目」「おとなしい」「几帳面」などと評価されている。単純に考えればいわゆる「いい子」として評価されているのである。しかし、そこには自主性の乏しさ、行動力の乏しさ、柔軟な対応ができない硬直性——復元力のなきも感じられる。その逆もまた然りである。

教師として、一人ひとりを見つめる眼



ふるさとシリーズ — この人に聞く —

しめ縄作り

石川 文治氏

矢作川から吹いてくる肌寒い風を受けながら、石川文治さんを訪ねた。今や、しめ縄作りの最盛期。仕事場からは熱気がひしひしと伝わってくる。熱気とともに漂ってくる稲わらの青々とした香りに魅せられながら、貴重なお話を伺った。

「はじめは、私のおじいさんが作ってつたのを村の人が見て、一人また一人と増えていったんですよ。」

大門のしめ縄作りは、祖父米太郎氏の試作に始まるといわれている。昭和に入り、文治さんの父親を中心として「大門しめ縄組合」が結成され、徐々に発展を遂げていった。文治さんは昭和二十七年

より二十余年間にわたり組合長を務め、現在の隆盛を築いてこられた。

「組合員が増えるにつれて当然生産量も増えてくる。それまでは康生辺りで小売りをしとったが、それだけでは追いつかなくなつて、名古屋まで売りに行きましたよ。だが、はじめのうちは買っちゃあくれなんだね。」

現在、岡崎の特産品として名を馳せている大門のしめ縄も、草創期の様々な困難を乗り越えてこそ築かれたものだという話を改めて知った。

文治さんの作った大しめ縄は、六所神社や岩津天満宮など数多くの場所で見られている。それは、長い間、風雨にさらしてもたるまないという高い評価を得ている。秘訣を聞いてみた。

「秘訣と言われても困るが、しいて言えば微妙な力の入れ具合だろうな。これも長年の勤と技術かもしれない。うまいへたは筋目を見ればわかる。気持ちを込めて作りんとい作品はできません。」
すぐに「秘訣は」と聞いてしまった自分に恥ずかしさを覚えると同時に、熟練した技を持った人でなければ言えない言葉に心を打たれた。

昭和三十四年に農林大臣賞、三十五年愛知県知事賞、さらに今年、教育文化賞を受賞された文治さんもよき後継者を得て、現在は「五万石宝船」や「子どもみこし」など特殊な作品を手がけてみえる。「自分の好きなことなら二時でも三時でも気を静めてやります。作品が仕上が

った時には本当によかったなあと思えますね。」

と「喜び」を語る文治さんの目に、一つのものを目指していることとする熱い情熱を感じた。

最後に、後継者に一言。

「古くからの技術は絶やさず、新しい技術は積極的に取り入れ、長く伝統を守ってもらいたい。」

縄をなう手に一段と力がこもった。

「神さんのもんを作らしていただけるのは本当にありがたいことです。」

という文治さんの言葉がなぜかいつまでも頭から離れなかった。

住所 岡崎市大門町一丁目十四の一
生年月日 明治四十三年十月十日



が柔軟で幅広いものでありたいのである。一つのパターンでしか子どもの言動を理解できない教師では困るのである。複眼で子どもを見つめていこう。

「しつけ」の三条件

葵中学校教頭 山浦 昭雄

「しつけ」とは、子どもに我慢の訓練をさせることである。

我慢させるとは、親や教師が「否」と言うべき時に「否」と言うこと。現代はあまりにもまあまあ主義が目立つ。

しかし、「否」というには次の三条件が必要である。

- 一つは、生徒の心理状態に即すること。
 - 二つは、世間一般の常識からはずれないこと。
 - 三つは、教師の人生観に適合していること。
- 「そんなことをしたら校長先生に叱られるぞ」と叱るのは、教師の人生観なしでもできるが、これでは生徒の心に響かないだろう。

「かくかくしかじかの考えから君の行動は認められない」と自分を打ち出す必要がある。「先生は古いなあ」と子どもは批評しても、自信をもって迫ってくる人物に一目おきたくなる心理（依存の対象）が生徒にはあるものだ。



雅楽伝承



52

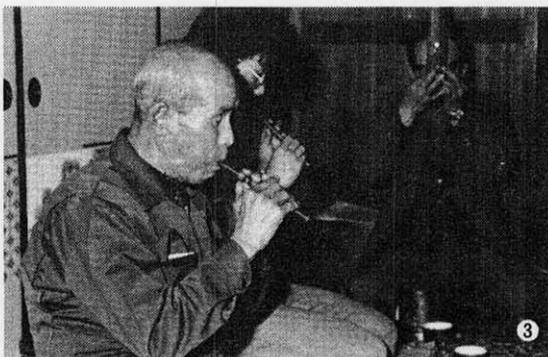


竜泉寺町に、雅楽の楽人の集まりがある。雅楽といっても、雲の上のことと思う人も多い。結婚式で演奏される雅楽は「越天楽」である。神社の大祭にも、舞に合わせて演奏される。また、相撲や演劇の最終日には、千秋楽ということばが使われる。千秋楽とは、雅楽の曲名である。

雅楽の歴史は古い。飛鳥時代、すでに半島より三韓楽と伎楽が入り、奈良時代には唐楽・度羅楽・渤海楽・林邑楽が伝来している。使われる楽器を唐楽に例をとると、三管（笙・篳篥・篳篥）、二絃（琵琶・箏）、三鼓（鞆鼓・太鼓・鉦鼓）である。代表的な曲には越天楽・清海波・蘭陵王・納曾利・陪臚・五常楽・千秋楽などが挙げられる。長い間、宮廷の保護のもとに伝統が継承されてきたが、明治六年（一八七三）五月の太政官布告によって、神楽・舞楽などの一般人の伝習が許可された。

市内の雅楽を奏する有志の結社は、美合・田口・仁木・大樹寺・触越・羽根・新堀・竜泉寺等々、いくつも数えることができる。

竜泉寺町にある竜泉社は、明治十三年（一八八〇）に有志が集まって、青野村で教えを受けたことに始まる。当初、あまりのむずかしさのために、同志は食事の時も指符を見、寝床に入っても口唇練習を重ねるほどであったと伝えられる。村の正尊寺で初めて法要に参画してより諸寺の懇望を受けるようになったという。形が整ったのを機に、小林吉吉・小林兼吉・山本栄太郎・山本新作・小林善吉



3



2



の五氏が発起人となって、竜泉寺楽社が誕生した。楽人は、いずれも伊勢や熱田などで講習を受け、若者に継承していく。現在、最年長は、近藤一郎氏で七十一才。最年少は、十九才の学生山本竜一さんである。農業の人もあれば会社員の人もある。現社員十五名。毎週土曜日に集まって、七時から夜半まで練習するという。記録によれば、大正六年（一九一七）より本年五月までの雅楽奉仕は、千回に及んでいる。市内の社寺はもちろんのこと、静岡・掛川・浜松・豊橋・豊川・蒲郡・豊田・安城・西尾・刈谷・常滑と、その活動範囲は大きい。代表者の近藤氏は、「小中学生のような若い人たちが加わってくれたならと思う。年令層の高いのが淋しい。栄ある教育文化賞を受けたのを機に、さらに輪を大きくして、伝統ある童楽社を絶つことなく、雅楽奉仕の活動を続けていきたい。」と語っておられる。

- ① 楽器の手入れは念入りにする。炭火で炙って笙の準備をする太田光氏
- ② 夕食後、集まってパートごとの練習、童笛の調子を調べる。左より山本正男氏、辻村清太郎氏
- ③ 練習の合間の話題は奉仕活動の思い出。笙の太田光氏、箏は左より近藤一郎氏、山本竜一氏
- ④ 正装で本番通りに笙を吹く。左より川澄淑子氏、太田光氏
- ⑤ 伝来の文化を偲ばせる蘭陵王の正装
- ⑥ 浦安舞の衣装は宮廷雅楽を思わせる川澄淑子氏
- ⑦ 納曽利の衣装で先輩を偲ぶ近藤一郎氏
- ⑧ 三鼓を合わせる。和琴の石川清氏、鼓は左より山本正男氏、川澄淑子氏、近藤一郎氏
- ⑨ 箏の仕上げ、左より柴田保氏、山本竜一氏

教育日々

育ちあい

梅園幼 徳山和子

この頃園庭では、クラスや年齢の枠にこだわらず、やりたい子が集まってきて縄跳びをする。

縄跳び歌「一羽のからす」などに合わせて跳んだり、先生に数を数えてもらい、その数を競いあつたりして楽しんでいる。

百回以上も軽々と跳べる子もいれば、ひっかかってばかりで、まだリズムに乗れない子などいろいろである。

この間も年中児（4才児）十数人が縄跳びの順番を待っていた。そこへ年少児（3才児）のCが縄を回している先生の所へ

来て、「ぼくもやりたい。」と言う。そしてすぐ跳ぼうとする。「Cちゃん、ほらみんな並んで順番待っているんだよ。」と言っても、やりたいといつたらきかないCである。そして先生早く早くとせきた

てる。この時、前に並



んでいたAたちは、「Cちゃんはい。Cの気持ちよく自分で自分の前に入れ、跳んでいいよ。」と跳ばしてやる。Cはうまくは跳べない。Cの動きに合わせる度何回か縄を回してやる。

そして「交替ね。」と次の子と代わる。しかし、Cは得意になつて、何度もこのようにして割り込んでくる。Cは平気で跳ぶ。初めのうちには黙認していた年中児であるが、こんなことが度重なると、年中児のBは、「Cちゃん、この列の後に並ぶと跳べるよ。」とCを列の後へ連れていって並ばせる。Cは不服そうな顔をしていたが、並んでいた。二、三日すると、縄跳びを終える列の後について順番を待つことができるようになった。

これはCの気持ちを、年中児なりに認めて満足させてやり、

しかも、順番を守るということを、責めたり怒ったりせず、「ここへ並んで順番を待つよ。」と実際に連れていって教えてくれたことによるものと思われる。

集団生活では、集団のきまり、約束ごとが守れないと友だちにも受け入れられず楽しく遊べないものである。Cは「並んで待つこと」「順番」ということを知つたのである。

このように、ささやかな活動にも、じっくりとかかわつて、小さな活動の中にある大きな意味を掘り起こしていきたいものである。

十一月も半ばを過ぎた頃、寒風の中を、ショートパンツで動きまわる女子バレー部の姿がある。本校では、十月からジャージを着てもよいことになつているが、この子たちは一向に着な

い。この光景は、何か私のやらせの様に見えるので、「もう、いい加減にジャージを着ればいいのに。」と、よく思ったものだ。そんなある日、キャプテンのMが、「先生、そろそろジャージを着ようと思いますが、いいですか。」と、言つて来た。私はもちろん、「着ていいよ。」と答え、「ただ、今くらいは動きだ」と、ジャージを着ても寒いぞ」と、付け足した。Mは、にやつと笑みを浮かべて立ち去つた。

それから十日たった今、相変わらずショートパンツでやっているから、うれしいような、心苦しいような気持ちである。

顧問になつて四年、私の気まぐれな技術指導はともかくとして、練習に対する真面目な取り組み姿勢だけは、妥協を許さず大切にしてきた。この子たちの寒さに負けないこの心意気も、その成果かも知れない。

ところで、今は、四時半が下校時刻ときている。有り難いことに、本校は、厳しい下校指導もさることながら、学活の終了時刻や部活の開始時刻を、全校体制で厳守してくれる。おかげで二十分間の練習は確保できる。この貴重な時間の練習内容については、何事によらず真剣に考



熱い冬

矢北中 高橋和宏

い。この光景は、何か私のやらせの様に見えるので、「もう、いい加減にジャージを着ればいいのに。」と、よく思ったものだ。そんなある日、キャプテンのMが、「先生、そろそろジャージを着ようと思いますが、いいですか。」と、言つて来た。私はもちろん、「着ていいよ。」と答え、「ただ、今くらいは動きだ」と、ジャージを着ても寒いぞ」と、付け足した。Mは、にやつと笑みを浮かべて立ち去つた。

えている。「練習時間が短いほど、その部の姿勢がよく分かる」これが、私の冬の口癖である。

今日も、四時五分に練習が始まった。運動量が多く、しかも秒単位で変化していく練習に、五分もすれば汗が光りだす。ここには、力を抜くひまはない。

こうして、「矢北のチームは小さくて苦しいなあ。」と、毎年言われながらも、なんとか、市西三大会で優勝・準優勝合わせて十回、県大会入賞、東海大会出場くらいの成績は残せた。

今日も、冬場の短い練習時間を精いっぱい充実させ、頬を赤くして校門へ急ぐ生徒たちがいる。校門では、全顧問が立ち並び、彼らの労をねぎらうようにあたたかく送り出している。

今日も、冬場の短い練習時間を精いっぱい充実させ、頬を赤くして校門へ急ぐ生徒たちがいる。校門では、全顧問が立ち並び、彼らの労をねぎらうようにあたたかく送り出している。

今日も、冬場の短い練習時間を精いっぱい充実させ、頬を赤くして校門へ急ぐ生徒たちがいる。校門では、全顧問が立ち並び、彼らの労をねぎらうようにあたたかく送り出している。

今日も、冬場の短い練習時間を精いっぱい充実させ、頬を赤くして校門へ急ぐ生徒たちがいる。校門では、全顧問が立ち並び、彼らの労をねぎらうようにあたたかく送り出している。

今日も、冬場の短い練習時間を精いっぱい充実させ、頬を赤くして校門へ急ぐ生徒たちがいる。校門では、全顧問が立ち並び、彼らの労をねぎらうようにあたたかく送り出している。





第19回県教育論文

優秀賞に六ツ美中学校体育部会

県教育委員会と県教育振興会主催の第十九回教育研究論文で岡崎市から応募した一八五点のうち七点が入賞した。

【共同研究】

▽優秀賞Ⅵ六ツ美中学校体育部会（代表神尾心一）

「自らの力を評価できる生徒の育成」―体育実技ノートを利用して―

▽佳作Ⅵ細川小学校二年部会（代表磯谷光男）

「パン作りの体験を通して豊かな見方・考え方を生み出す社会科学習」―二年パン工場で働く人たち―

【個人研究】

▽佳作Ⅵ桑木富士子（大樹寺小）

- ◆寄贈刊行物・資料等）
- ◆読書の記録 校務主任会 B5 孔版印刷
- ◆岡崎の社会教育 岡崎市教委 B5 七一ページ
- ◆啓明―自ら学びとる児童の育成― B5 六四ページ
- ◆のびのびと遊べる子をめざして―自発活動を促す指導― B5 七六ページ
- ◆教材構造図集 広幡小 A5 一〇八ページ
- ◆道徳的实践力を育てる道徳の授業 A6 五一ページ
- ◆金子ゆかり（広幡小）
- ◆柴田 輝夫（広幡小）
- ◆有澤田香里（竜美丘小）
- ◆藤田 吉信（甲山中）
- ◆昭和六十年年度、岡崎市教育研究論文募集に対し、個人研究論文三三七三点、共同研究論文九一点、計四六四点の応募があった。応募論文の内訳は次の通り。
- ◆市教育論文の応募状況
- ◆昭和六十年年度、岡崎市教育研究論文募集に対し、個人研究論文三三七三点、共同研究論文九一点、計四六四点の応募があった。
- ◆（小学校）
- ◆国語70、書写2、社会30、算数36、理科48、音楽7、図工8
- ◆体育26、家庭2、道徳12、特活34、特殊9、視聴覚3、図書館5、保健14、生徒指導3、教育全般12
- ◆（中学校）
- ◆国語17、社会19、数学13、理

- ◆科11、音楽9、美術4、体育18
- ◆技家12、英語10、道徳2、特活13、特殊2、視聴覚5、生活指導3、教育全般5
- ◆六ツ美中学校に日本視聴覚教育賞
- ◆昭和六十年年度、日本視聴覚教育賞論文において、六ツ美中学校が日本視聴覚教育協会会長賞を獲得した。
- ◆青山君（愛宕小六年）が統計グラフ全国コンクール第三席
- ◆昭和六十年年度、統計グラフ全国コンクールにおいて、愛宕小学校六年、青山俊宏君の作品「どんな鳥がくる」が、第三席に入賞した。
- ◆日本標準教育賞に加藤教諭（連尺小）
- ◆昭和六十年年度、日本標準教育賞論文において、連尺小学校加藤由美子教諭が優秀第一位に入賞した。
- ◆FBC秋花だん・花いっぱい

- 優良学校
- ▽秋花壇奨励賞に上地小学校
- ▽花いっぱい優良学校
- ・優秀校Ⅵ六ツ美北部小学校
- ・優良校Ⅵ福岡小学校
- ◆岡崎市自作TP作品69点が入選
- ◆昭和六十年年度、岡崎市自作TP作品募集に対し、小学校85点中学校28点、計113点の応募があった。審査の結果、入選者は次の通り。
- （小学校）
- ▽国語Ⅵ池田えつ（男川）鈴木滋他二名（男川）谷川光代（緑丘）小栗春枝（愛宕）加藤きよえ他三名（本宿）栗田弘子（大樹寺）東忠（大樹寺）山田禮子（六ツ美中部）
- ▽社会Ⅵ鈴木金利（梅園）澤幸子（男川）高井幸子（三島）八田敏公（連尺）酒井君代（本宿）桑木富士子（大樹寺）
- ▽算数Ⅵ清水隆史（福岡）八田昌子（三島）尾崎としえ（広幡）金子ゆかり（広幡）原嶋麻規子（広幡）犬塚尊夫（井田）柴田靖子（大樹寺）大山悦子（大樹寺）鈴木孝幸（大樹寺）石川新史（大樹寺）三浦敬子（大門）大藪佳輝（大門）河合美智代（大門）
- ▽理科Ⅵ金田知子（男川）稲垣

- 幸一（竜美丘）水越元彦（井田）
- 宮西康子他一名（本宿）鈴木淳二（細川）吉田章二（大樹寺）高橋啓三（大樹寺）岡本孝幸（大樹寺）大水ゆかり（大門）
- ▽音楽Ⅵ原田尚子（大樹寺）
- ▽家庭Ⅵ岡本知子（大樹寺）
- ▽図工Ⅵ浅井真理子（梅園）
- ▽保健Ⅵ水野順子（細川）
- ▽道徳Ⅵ小栗浩子（梅園）明保恵子（美合）河上真一（大門）長坂寿子（井田）
- ▽特活Ⅵ中村邦夫（男川）本宿小国語部、山本健治（大樹寺）三木世栄子（大樹寺）北村栄子（城南）福応節子他（矢南）（中学校）
- ▽国語Ⅵ加藤裕子（美川）鶴田紀美子（矢北）
- ▽社会Ⅵ小林直美（美川）原田平（六ツ美）
- ▽数学Ⅵ畔柳義範（美川）内藤広光（南）本多有三（葵）杉山隆之（常盤）田村康則（六ツ美）
- ▽理科Ⅵ山本信夫（美川）後藤晶基（矢北）林真二（六ツ美）
- ◆矢北中理科部、六ツ美中理科部
- ▽技家Ⅵ浅沼雅弘（美川）渡辺総意（矢北）平川美也子（矢北）矢北中技家部
- ▽特活Ⅵ伊藤直也（矢作）



岩津町 円福寺

師弟の絆

岩津町にある浄土宗の古刹円福寺。真浄院の住職奥村玄祐氏の案内で、境内西隅にある墓地を訪れると、入口近くに生花の目立つ石塔に出会う。

台石に深々と刻まれた「筆子中」という字が、教え子たちの師を思う心の厚みを感じさせる。

中村安兵衛

寺子屋の先生である。三河国額田郡誌によれば、「嘉永五年（一八五二）より」とあり、明治三年（一八七〇）の時には、男二十一人、女三人の二十三人に習字、読書、算術を教えていたと

いう。現当主の中村安鉞さんの家は、円福寺東隣にある。

明治五年（一八七二）八月三日、太政官布告をもって学制を公布したが、江戸中期よりこの時までの庶民教育の中心は寺子屋にあった。旧岩津町地内でみると、阿知和村一、八ツ木村一岩津村二と四校であった。

当時の教えが読み・書き・そろばんの手習いだけであったとはいえず、その師の他界に際し、嘆き、悲しみ、墓塔を建てる心根に、師弟の絆の大きさを思うこと、ひとしおである。

●カ
ツ
ト

北野小 馬場久明

この本を

- *一心一仏 松久朋琳 ￥1200
講談社
- *教育改革はミニスクールで 渡部昇一 ￥980
文芸春秋
- *みち草わき道しぐれ道 藤山寛美 ￥980
東京新聞出版局
- *百言百話（明日への知恵） 谷沢永一 ￥520
中央公論社

※ことばを失った若者たち 桜井哲夫 ￥480
講談社

女の子が「ボク」「オレ」と言う、味わいのない世の中になった。

学生運動の結果、若者の間には、対立を好まない傾向が生まれ、それが自他の境界を突き崩すことにつながった。男と女、大人と子供、親と子、教師と生徒のけじめがあいまいになり、そこに不毛なことばが生じている。

著者は、ことばに実体が伴わなくなってきた1960年以後の社会風潮を分析しながら論を進めている。ぜひ、一読を。

お屠蘇。一年三百六十五日が始まる。屠蘇はもともと草の名。この草より孫思邈という人が屠蘇散を発明した。屠蘇散をひたした酒を飲むと、一年中の邪気が払えるという。邪気を払ったからとて、そこは心の持ち方。屠蘇機嫌もほどほどにして、一日一日を着実に歩き出そう。

新年の門戸に張る注連飾りは、元来、神の占有する清浄な区域を示す縄張りであったそうだ。

先日、注連縄作りの名人から貴重なお話を伺う機会を得、気が引き締まる思いであった。今年も、いや今年こそ良い年であるようにと願わずにはいられない。春立つとわらはも知るや飾り縄 芭蕉

シ オ ス ア

甘酒の始まりは、奈良・平安時代にまでさかのぼる。江戸時代から冬の温かい飲物として庶民に親しまれてきた。

最近では、季節を問わず飲むことができるが、神社が初詣で客にふるまう甘酒は冷気の中、身体が暖まりとてもおいしい。人工甘味料の氾濫する今、こういう素材な味を大切にしたい。

墨をすって、書き初めを書く。少々古風かもしれないけれど、新しい年を迎えて、一筆如何。

昔はその年の干支でめでたいとされる方角に向かって慶賀の歌を書いたり、書き初めをどんど焼きの火にかざして上達を祈願したといわれている。腕はともかく新年の心意気をどうぞ。